

## 隨想「忘れ得ぬ労使の人々」第23話番外編

### 「卓越した軍事の知識」 江畠謙介 軍事評論家

湾岸戦争を報道する番組は、映画の戦闘シーンを地で行くようなカットの連続で多くの人をテレビの画面に釘付けにした。

世の中にはなに評論家と称する評論家が数多く存在するが、“軍事評論家”はNHKテレビの番組での存在を初めて知ることになった耳新しい評論家である。

軍事評論家の名前は江畠謙介という人物であるが、名前より先に彼の風貌とりわけ髪型がユニークで視聴者の多くが記憶し、そして江畠氏の特色あるヘアースタイルは瞬く間に茶の間の話題をさらった。

江畠氏は澄んだ目の知的レベルが高そうな容貌をしていて語り口も自信に溢れ、見る人、聞く人を強く引きつけていった。

そして彼の持っている軍事に関する豊富な知識や情報を誰にも判り易く生真面目に語る解説者ぶりは、みるみる江畠ファンを増やしていった。かくいう私もその一人であった。



左・江畠謙介氏

江畠謙介氏は軍備・兵器に関し、信じられないほどの深い知識と最新の情報を頭の中に蓄積していて、ほとんど知識のない視聴者に戦闘の場面を判りやすく解析をしてみせたのである。

思わず手に汗するような画面でも決して激することなく淡々と冷静に分析しつつ、先を読み予測をしていくのである。やがて湾岸戦争に関してはいつの間にか江畠氏が解説するNHKの番組以外見なくなってしまった。

世間の関心が高まる最中、日本生産性本部は話題の江畠氏を講師に迎え講演会を催し私も傍聴した。

講演終了後担当者に氏を紹介してもらい、私の主催する“生産性トップマネジメントクラブ”への講演をお願いしたところ快く引き受けていただいた。

テレビ画面でみてきた通り、やはり穏やかで律儀で謙虚な方である。評論家にありがちな饒舌で一方的なしゃべりもない。

すでに売れっ子となって、あまた舞い込む講演依頼の合間を縫って自宅がある千葉から会場のある横浜へ来ていただいた。

江畠氏の講演は、話だけでなく見たことも無い最新兵器のカラー写真を、平素軍事問題に接近する機会のない人たちが理解しやすいようプロジェクターで表示しながら解説をするなど様々な心くばりをしていた。

軍艦の一見ただの船の装飾かと思われたものは、実は高性能レーダーだったなど近代兵器の持つ現実を目の当たりにして講演を聞いている企業のトップ一同が息を飲んだ。

講演後江畠氏の偉ぶらず極めつきの誠実さ、お人柄にひかれ、電子メールのアドレス交換をお願いした

ところ、心よく自宅のアドレスを教えてもらった。

私のメル友の皆さんには、四季折々に感じたことや趣味の旅行や沖釣の釣果、花便りなど様々を雑文にしたためて、勝手に送りつける他愛もないものであった。

無論江畠氏にも送り付けた、時には江畠さんからも簡単な感想をもらったりしながら交流を重ねた。

ある日の朝刊を開くとそこに江畠謙介氏逝去の文字が紙面に躍っていた。享年60歳まだ若いのにどうしたのか何故?と絶句した。

それからしばらくして自宅に“江畠謙介氏を偲ぶ会”的案内状が届いた。仕事の上のお付き合いはあったが、飲み食いや個人的に行き来があったわけでもなく、たまにメールの交換や季節の挨拶を交わす程度の交流であった。それなのになぜ私にまで・・・と案内を手にちょっと戸惑った。

すると急に江畠氏の誠実な人柄が思い出され、万難を排しお別れの会に出席させていただくことにした。当日の会場は若くして逝去した氏を惜しむ人々で溢れかえっていた。テレビなどで目にする著名な政治家、経済人、評論家、報道陣など様々な分野の方々が、お別れ会にやってきていて氏の交友範囲の広さを改めて知った。

私は様々な思いを込めて江畠氏のあの特色ある髪型の遺影に深々と頭を下げ、心の中で早すぎますね。

残念ですと言いながら花を手向かた。

会場の隅で江畠夫人が参列者の弔意を受けられていることに気づいた。

一言お悔やみをと思い一段落したお手すきを見計らい、打ち沈んだ夫人に頭を深く下げ

「生産性本部の・・」と自己紹介しようと声を出すと夫人はすかさず「宮崎さんですね」と面識もないはずの私に向かって名前を告げるのである。

夫人とは一面識もないし、江畠氏ご本人からもご家庭の話など伺ったことなく驚き、まごついた。

夫人の話では江畠氏には持病があって家にこもって原稿書きや勉強をすることに時間の大半を費やしていたが、そんな時私の勝手に送り付けたメールが大層息抜きとなり、気分転換に役立ち時には待ちわびることもあったそうだ。メールが届くと夫人にも声をかけ一緒に釣りや季節の便りを見ながら、家に閉じこもる気分を紛らわしていたのだという。

話を伺いながら夫人に「お世話になりました」と頭を下げられしんみりしてしまった。

そうと知つていればもっと江畠さんに喜んでもらえる内容を頻繁にお届けしたのにと心で呟きながら、夫人にもう少し故人となった江畠謙介氏の人となりを伺いたかったのであるが何やらこみ上げてきて告げる言葉を失い、むやみに頭を下げ続けたのである。別れは辛い。